

インド密教とマンダラ

大正大学講師・真言宗豊山派南蔵院住職

野口圭也

第3回 「マンダラ」ということば（1）

I. 「マンダラ」の原語と漢字表記

マンダラの原語は、古代インドの文語であるサンスクリット語の **maNDala** です。ローマ字つづりの中の n と d の下に点が付いていますが、これらは口の中で舌をひっくり返して発音する反舌音に相当します。下に点のついた n は反舌の鼻音、下に点のついた d は反舌の有声無気音を表しています。これらの音は日本語に存在しないので、私たちが正確に発音するのはかなり難しいです。

サンスクリット語の **maNDala** は、「円」「円盤」「丸いもの」「球体」を意味します。例えば **jAnumaNDala** ということばは、**jAnu** が「膝」の意味なので、全体では「膝のところにある丸いもの」ということで「膝頭」の意味になります。また **candramaNDala** ということばは、**candra** が「月」ですから、全体では「満月・月輪」の意味になります。私たちが「まる」ということばを聞くと、自然に円形のかたちを思い浮かべるのと同じように、**maNDala** ということばを聞くと、インドでは丸い形が想起されるのでしょう。

仏教が中国に伝わり、インドのことばで記された仏教文献が中国語、つまり漢文に翻訳されるようになったのは、A. D 2 世紀のことです。インド言語の単語を漢字に直すとき、二通りの訳し方がありました。一つはインドの語に意味が対応する漢字に訳す意識、もう一つは意味を訳すのではなくインドのことばの発音に、音が近い漢字を当てはめる音写でした。例えば **prajJA** (サンスクリット語) または **paJJA** (パーリ語) というインドのことばの意識語として「慧」とか「智慧」という漢字があるのに対し、音写語として「般若 (はんにゃ = **paJJA**)」という漢字があります。音写語の場合、漢字の意味はインド語の意味と全く関係ありません。音を表す記号として漢字を用いているわけです。

maNDala というインド語は、漢訳されるときに、次のように経典によって相違する何通りかの漢字で音写されました。それぞれの漢字の後にローマ字で記したのは、現代中国語 (北京語) の標準音です。

- ① **曼荼羅** (man-tu-luo) : 不空訳『金剛頂経』・輸波伽羅 [=善無畏] 訳『蘇悉地羯囉経』・『蘇婆呼童子請問経』
- ② **漫荼羅** (man-tu-luo) : 善無畏・一行訳『大日経』
- ③ **曼陀羅** (man-tuo-luo) : 般若訳『諸仏境界撰真實経』
- ④ **曼拏羅** (man-na-luo) : 菩提流志訳『不空羼索神變真言経』・施護訳『仏説一切如来真實撰大乘現証三昧大教王経』

日本語での読み方はすべて「マンダラ」です。しかし漢字を見ると、微妙な相違があります。特に舌をひっくり返して発音する **NDa** に対応する漢字を当てはめるのに、かなり苦労したようです。手元の漢和辞典 (鎌田正・米山寅太郎著『大漢語林』) を見ると、「荼」の字の音は漢音で「ト・タ」、呉音で「ヅ・ダ」となっています。また「陀」は漢音で「タ・チ」、呉音で「ダ・ヂ」。「拏」の音は漢音で「ダ」、呉音では「ナ」です。

漢字は一つの文字に対していくつかの読み方の音が存在する場合があります。特に大きな相違は漢音と呉音の相違で、『広辞苑』によれば、漢音は「唐代、長安地方で用いた標準的な発音を写したもの。遣唐使・留学生・音博士などによって奈良時代から平安初期に輸入された」音です。同じく呉音は「中国古代の呉の地方（揚子江下流沿岸）から伝来した音。わが国では多く僧侶が用いた」とされます。上に列挙した経典が漢訳されたのは、ほとんどが唐の時代（施護のみは宋代）なので、「唐代の長安音」である漢音に該当しそうなのですが、そういうわけでもありません。「拏」の字では漢音の「ダ」に該当しますが、「荼」や「陀」の字では呉音の「ダ」に当たります。

これらの漢字音写語の中では、最もよく使われるのは①の「曼荼羅」です。日本にマンダラをもたらした弘法大師空海も、この字を用いています。空海の師匠の師匠に当たる、不空が用いた訳語ですから当然かも知れません。しかし③の「曼陀羅」の字を用いる例も、しばしば見られます。純粹に密教に属するマンダラは①の「曼荼羅」、それ以外のマンダラについて言う場合には③の「曼陀羅」の字で表記する、という説もありますが、確かな根拠に基づいた、絶対的なものとは言えません。

音写漢字の相違は、それぞれの訳者が、自分の感覚で最も近いと思った音を持つ漢字に当てはめた、というのが実際のところかと思われまゝです。すると、どの文字を使っても大差はないこととなりますので、ならば最もよく用いられる①「曼荼羅」の字を使えばよからう、となります。しかしながらこの文では、漢字でなくてカタカナで「マンダラ」と記しています。これは次のような理由によります。

日本に本格的な密教—いわゆる「純密」—を伝えた空海は、帰国直後の大同元年（806年）10月22日付けで、自身が唐からもたらした、不空訳の密教経典を中心とする仏教文献と密教法具・宝物のリストを朝廷に提出しました。このリストを『新請来の経等の目録を上つる表』(略称『御請来目録』)と言います。本来ならば、20年間勉強を修めなければならない留学生として唐に渡ったにもかかわらず、2年で帰って来たことの弁明でもありました。「空海、闕期(留学期間が途中であること)の罪、死して余りありといえども、竊かに喜ぶ、難得の法(密教のこと)、生きて請来せることを」と自ら述べている通り、たとえ留学中途切り上げという重大な罪を犯しても、正統密教を日本に伝えるために、敢えて帰国したことの意義の大きさを強調しています。

この目録の中に、「大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅」「大悲胎藏法曼荼羅」「大悲胎藏三昧耶曼荼羅」「金剛界九会曼荼羅」「金剛界八十一尊大曼荼羅」という、重要なマンダラが挙げられています。いわゆる胎藏マンダラと金剛界マンダラです。さきに述べたように、ここではどちらのマンダラもともに「曼荼羅」という字を用いています。このため、以後の真言宗では、もっぱら「曼荼羅」と表記するようになりました。

しかしながら、胎藏マンダラを説く経典である『大日経』では、マンダラの語は「漫荼羅」と音写されているのです。つまり、経典の引用文では「胎藏漫荼羅」と書かなくてはなりません。しかしマンダラの名前を挙げる際には、「胎藏曼荼羅」等と記すこととなります。さらに他の経典に説かれるマンダラは、経典の原文では「曼拏羅」だったり「曼陀羅」だったりします。これらもすべて「曼荼羅」と書いたのでは原典と不一致となり、いかにも落ち着きが悪いと考え、音写漢字ではない音写語として、他の外来語と同じように、カタカナで「マンダラ」と表記するようにした次第です。